

海外生活 エッセー

ニューヨーク事務所

コミュニティーが住民を支える街、 ジャクソンハイツ

(一財)自治体国際化協会ニューヨーク事務所 所長補佐 猪丸 雄太 (広島市派遣)

コロンビアのパン屋、バングラデシュの市場、ネパール料理レストラン、アフガンカフェ。「人種のるつぼ」といわれるニューヨークの中でも、市内東部クイーンズ区に位置するジャクソンハイツは、さまざまなバックグラウンドを持った人々が世界中から集結し日々賑わっています。およそ10万人が生活するこのエリアは、その60%の住民が移民で構成されています。70以上の国籍からなる人々が暮らし、167の言語が交わされ、まさにニューヨークの多様性を象徴するエリアとなっています。

→ ジャクソンハイツはこうして生まれた!

今日のジャクソンハイツがあるエリアは元々畑が広がる農地でした。そこに変化をもたらしたのは1917年に延伸された高架電車(現在の地下鉄7番線)です。新しい交通手段の登場で、ジャクソンハイツはマンハッタンの中心部までわずか20分という距離になりました。この地の利を生かして開発が進み、マンハッタンから多くの中流階級の労働者が移り住みます。それでも1960年代初めまでは、住民の大多数は白人が占めていました。

転機となったのは、1965年に改正された移民法です。それまで行われていた国別の人数割当て制度が廃止され、移民希望者の技能や米国居住者との親族関係に焦点を当てて審査を行う方針に転換されました。これ以降、



ジャクソンハイツの街中の様子

手頃な住宅価格や交通の便の良さなどを背景に、中南米やアジアの移民がジャクソンハイツに流入し、現在の多様な民族で構成される街が形成されました。

→ 新型コロナウイルスがもたらした大きな影響

2020年春、ジャクソンハイツはニューヨークにおいて新型コロナウイルスの発生源の1つとなりました。多くの感染者・死者を出し、人的・経済的に大打撃を被りました。このエリアは日雇い労働者やレストラン従業員など対人の仕事に従事している人が多く、また密集して生活している世帯の割合が高かったのが理由とされています。

→ 地域を支えるコミュニティー冷蔵庫

新型コロナウイルスの影響により、多くの住民が生活に困窮する中、ジャクソンハイツのとある地区では、毎日の食事の確保に苦勞する住民を助けようとコミュニティー冷蔵庫が設置されました。大通りに面したレストランが冷蔵庫の設置場所と電気の供給を引き受けてくれました。地域住民は自宅で収穫した野菜や果物を寄付するほか、必要なものを自由に持ち帰ることができます。この活動は40人以上のボランティアが冷蔵庫の清掃とストックのサポートを行っています。パンデミックにより破壊されたようにみえたコミュニティーですが、今もしっかりと地域を支えています。皆さんもニューヨークにお越しの際は、活気あふれるジャクソンハイツにぜひ足を運んでみてください。



コミュニティー冷蔵庫